

ぶれない経営がブランド

最近「ぶれない経営」をある会長に進められました。即取り寄せ読みました。

それぞれのトップは、こだわりの軸を貫き、ぶれない。そして顧客ことを、社員よりも第一に考えている。最終的に会社利益をもたらすのは、金でなく、顧客である。

ブランドは消費者との絆、互いの約束であってブランドを介することで、経営者自らがすべての顧客との関係に責

任を持つていのである。

職人技のこだわり、ネット通販の自前主義、リゾート再生を起業、ライフスタイルのインテリア、救命救急医療、ホテル予約サイト、などの責任者が語っています。

読んで思うのは、すなわち、遺すものは金ではない。精神（スピリッツ）なのである。

「地上で唯一生き残るのは、変化できる生物」とダウインが言っています。

変化の中で人・社会に役立つ「美意識」の会社、結局は存続するのだと思います。



(有)西川経営オフィスサービス
中村会計
事務所便り
2009年10月13日 (火) N066
地域から明るい未来を作ろう

西川経営のブランドは「人」

ようやく政権交代で国税不服審判所「在り方」の見直し」が視界に入ってきました。

これまでは、処分庁である税務署に「異議申し立て」当然に却下、国税不服審判所に「審査請求」できる制度になっています。

国税不服審判所制度

そして民事「税務訴訟」です。そもそも、審判所の職員は国税当局の職員です。人事交流の出自者なのであります。

どうして三段構え構造になっているのでしょうか。それは、霞ヶ関官僚支配に意味があるのでしよう。

納税者に、大きな（時間・金銭・精神的）負担を強いり当局の恣意的な執行を擁護す

真に第三者的立場で公平な裁決下されるか、大きな疑問が以前から指摘されています。審判官自体、現場のたたき上げです。現場の足を引っ張り、組織のモチベーションの低下を避けたい思惑が、実際感じます。

る側面を有しています。前政権の、影の支配者、黒子だった財務省（前大蔵省）です。当然と言えば当然な制度自体からは「日本の美学」が感じられない。即裁判への道、国家賠償適用の道を速やかに開くべきでしょう。

納税者憲章を制定 予算編成で行政刷新



結婚とは不幸になる覚悟か

良く聞くのですが、結婚して幸せになると聞きます。果たして本当でしょうか。人生をバラ色の一生で終えた人は殆どいないのではないのでしょうか。決して少子化を推進するつもりは、ありませんが不景気でも、離婚率は上がっているようです。亀井金融担当大臣が家庭

崩壊・凶悪犯罪家族内の殺人事件が増えるのは、小泉・竹中政権以降、大企業が日本型の家族的経営を捨てたため——東京都内の講演会で口にした「経団連批判」が波紋を呼んでいます。現在日本はアメリカと婚

姻関係にあります。フリー、フェア、グローバルという三つの標語。フリーは市場原理至上主義、フェアは透明性、グローバルは国際化の三つの標語がアメリカの陰險な対日占領政策の骨子です。国民は不幸そのものです。